

稲作農家全戸で取り組む「人づくり・土づくり・米づくり」

JA あまるめブランド米振興会会長 佐藤 一彦

JA あまるめ営農部 佐藤 隆一 部長

JA あまるめブランド米振興会では安全・安心な米づくりと環境保全型農業に取り組んでいます。当 JA 管内の稲作農家全戸を会員として(1)稲作農家全員の意思が反映される組織(2)土づくり環境保全型農業の推進(3)消費者に信頼されるおいしい米づくりを目的としています。

取り組み内容のひとつが、堆肥の自給自足システムです。平成 12 年に「あぐりん」という堆肥センターを設立しました。施設は農協で取得し、利用組合として散布を請け負います。管内の畜産農家から供給してもらう畜糞とコントリーエレベータから出るもみ殻を混合して、完熟堆肥を作ります。平成 19 年で管内の 62%の散布を行いました。GIS を平成 21 年から導入し、圃場位置などが管理できる体制にしました。

昭和 37 年から取り組んでいる共同防除は、必要最低限の農薬防除です。管内を 19 ブロックに分けて防除班を組織しています。防除日時を指定し集落で一斉に行うことで、最小の農薬量で最大の効果を発揮します。

斑点米カメムシ類防除も、県の指導では最低 2 回必要だとされているが、当管内では 1 回のみです。ヘリで全体を防除し、効果を高めます。カメムシ被害は平成 20、21 年ゼロです。

初期害虫防除薬剤「フィプロニル」の使用休止にも取り組んでいます。400ha で 1~2 年使用すれば、翌年は害虫の発生密度が低下するので、使用せずに済みます。平成 16 年に使ったので平成 17 年は休む、平成 18、19 年は使い、平成 20 年は休む、という具合です。

共同催芽・温湯消毒にも取り組んでいます。共同催芽体制で、温湯消毒という薬剤を使わない消毒方法に努めています。全体の 77%で取り組んでおり、個人の取り組みも合わせると 9 割近いと考えています。

また、育苗土の代わりにもみ殻を使う「もみから成形育苗マット」を使用しています。もみ殻の活用ができ、田んぼに戻すことができます。管内で一括すると、1~2 割のコスト低減にもつながるという試算も出しています。

化学肥料の節減として、1000点の土壌分析に基づくCEC(塩基飽和度)マップの作成、食味管理の実施、栽培マニュアルの作成などを行っています。おいしさと環境負荷軽減のため、組織をあげた取り組みです。

さらなる安全の工夫として、圃場表示旗を作って全筆に設置している。過剰・過少散布の回避の意味があります。

顔の見える交流を目的に、消費者との体験交流田を平成元年から行ってきました。売れる米づくりを基本とし、農協と農家組合員、ブランド米振興会が一体となった組織として、食糧危機の基盤づくりに取り組んでいきたいと思えます。